

聖霊の働き

大森スエ

今年の夏の思い出、それは今までの私の人生を深く振り返らす体験だった。

私の母教会ともいえる芦別教会の牧師、戸村政博先生の追悼礼拝の知らせを受けた。

芦別を去って三十年が過ぎている。

懐かしさに出席を願い祈っておりますと、芦別に住む娘から電話が入り「お母さん待っているよと」明るい声に、うれしくて芦別に向かった。

久しぶりの芦別は、文化都市に変わり昔の面影はなかった。

当時の芦別は炭坑街で、終戦当時引揚者を受け入れ、石炭を掘る労働者を集めていた。

戸村牧師は、労働者に福音を伝えるために寝起きを共にされた。先生の思い出を偲ぶ。

八月三十一日祈りの家に招かれ礼拝を守る。

「山べにむかいて目をあぐ……」（三〇一）

愛唱讃美歌が初秋の空に流れ、思い出を深めた。

矢島牧師の聖書の朗読。Ⅱコリント四・16、「外なる人」は衰えていくとしてもわたし

たち「内なる人」は日々新しくされる。

戸村牧師の八十才の生涯は終わり、天に召された霊と地上にある私達と聖霊の働きによつて結ばれ、礼拝を守った。

豊かな食事が用意されたテーブルを囲み、思い出を語りあう追悼会であつた。

礼拝中、思いがけない事が起こつた。

長い間、信仰から遠ざかっていた娘の上に聖霊が働かれ、神さまは娘の信仰をよみ返らせて下さつた。私は神さまの驚くべきみ業を感じた。長い間の祈りが聞かれた。

娘は老の私をいたわり、実の親子に勝る心づかいに変わった。

九月七日は滝川教会に導かれ礼拝を守り、二人でともに聖餐にあずかつた。

「お母さん、来年の夏また来てね」、やさしさに別れをおしんで東京へ戻つた。昔も今も生きて働く聖霊のみ業を見た。